

## 論文の要旨

論文題目 女性を消去する文化  
氏名 越智和弘  
学位 博士（文学）  
授与年月日 平成 17 年 7 月 20 日

本論文は、二つの基本的な疑問を起点に据えている。それらは、（一）そもそも西洋だけがどうして、世界に規範を提供する文化となりえたのか、（二）西洋に生まれた資本主義は、どうして十九世紀以降急速に発展し、世界を覆い尽くすまでの経済システムになりえたのか、である。今日では、ほぼだれもが自明のことと受け入れがちな現実の奥にひそむ西洋文化の本質に、女性の消去という観点からメスを入れるのが、本研究の目的とするところである。

女性の消去とは、男性以外のものを資本構造に取り込むために西洋が編み出した独特な仕組みであり、それは今日の観点からすれば、女性が社会に参入可能な仕組みをつくり上げる巧みなメカニズムだともいえるだろう。女性消去は、資本主義の誕生とともに始動していたことが想定される。しかし本論においては、そのからくりが円滑に機能するための準備が整う十八世紀末から十九世紀にかけてと、広義でみた女性的他者を男性と等価値な労働力として均質化する条件が整う二十世紀後半期という、二つに時代に起きた心的な変化に光を当てることになる。

この二段構えで起きた心的変化は、性、とりわけ女性の消去とその資本への吸収を目的とすることで一貫している。地球上の他のいかなる文化にもみられないこの特異なプロセスを経ることによって初めて西洋は、世界に覇権を主張する下地を整えられたのだと考えられる。しかし本研究は、十九世紀を性が資本の価値へ変換される条件が整った時代とみなす視点が、二十世紀後半期を同時代的に生き、その歴史的意味を考察する作業をとおしてしか獲得しえなかったものであることを考慮し、時代的に新しいものから古い方へたどる順に編まれてある。

第一章は、二十世紀後半期を、性をめぐってとりわけ大きな変革が起きた時期としてとりあげる二つの理由を基軸に構成されている。それは第一に、この時期に起きた性の解放の結果、男性的価値への均質化による女たちの資本市場への大量吸収が始まったこと、そして第二には、性解放の流れが西洋以外の地

域にも波及するにともなって、女性を資本の交換価値に変換する均質化のプロセスが、非西洋へと大きく拡大しはじめたと考えられることによる。

学生運動が起きた六〇年後半期に、若者の意識のなかでセックスが、原罪であるがゆえに悪とみなす否定的人間観から、自然な行為であるがゆえに善だとする肯定的な場へ置き換えられたことは、たしかに西洋史上起きた画期的な心的変化である。しかし若者たちが起こしたこうした一連の運動を非西洋的立場からみた場合、むしろ看過しがたいのは、否定的にみるにせよ肯定的にみるにせよ、とにかくそこにはセックスへの過剰なまでのこだわりがみられることである。そもそも西洋人にとって、性はどのようにしてそれほどまでに重要な問題でありつづけるのか。一般にはまだ十分に理解されているとはいえないこの基本的な問題に焦点を当てるため、性解放運動からセックスを起爆剤に第二の女性運動とも呼ばれるフェミニズムが勃発するまでの必然性を考えることが、第一章の初期的な課題となる。

ただそれ以上に第一章に課せられた重要な使命は、性を解放するものと信じられていた学生運動からフェミニズムにいたる一連の運動が、じつはキリスト教的禁欲主義の伝統的な呪縛を完全に解き放つにはいたらなかったことを、明白にすることにある。つまりこの時代の若者たちは、いわばルソー的に、自然であからさまな肉体の提示や物理的な性行為のみを肯定し美化することに終始しすぎたあまり、合理的説明を逃れる性愛の局面を不明瞭なまま排除するという、ある種の還元主義に陥ってしまったのである。

第二章においては、前章に引き続いてもう一つの還元主義がこの時代に横行してしまったことを明らかにする。この二つ目の還元主義は、性をめぐる世界において男性的攻撃性と女性的恍惚の双方に息づく暴力的要素を、一括して倒錯へと押しやる性格だと、まずは規定しうる。これは、当時の学生たちがよりどころとしたルソーの精神が兼ね備えていたロマン主義的な側面とも関連している。第二の還元主義は、性の解放を生物学的行為に帰着させてしまった第一の還元主義とも相俟って、ロマン主義のもう一つの重要なメルクマール、すなわち禁欲主義に彩られた女性の脱肉体化と快楽敵視の精神を、七〇年以降の西洋社会に復活させるという皮肉な結果を生んでしまった。

これは、本来的に肉体と快楽への憎悪、言い換えればそうしたものを体現するとされる女性敵視に由来するサディスティックな男性的破壊性と、女性運動のなかから浮上しつつあったもう一つの暴力性、すなわち暴力を封じ込めるべく自己完結的に機能するマゾヒスティックな暴力性との区別を不明瞭なままにしておく方向で作用したため、独自のセクシュアリティを奪還すべく動きだしたフェミニズムにとっても、大きな障害となった。かさねて、物理的なセックスのみを解放し、合理性から逸脱する性の神秘的な側面を一括してロマンティ

ックな世界にゆだねてしまった当時の風潮は、そもそもこうした考え方を生む母体でもあったロマン主義の性格、すなわち脱肉体化され精神化された愛の讃歌を、無批判なまま現代によみがえらせることに貢献してしまったのである。

第三章の課題は、フェミニズム運動を通して女たちが勝ち得た洞察をたどることと、そこから必然的に生まれた原始母権制への憧憬について考察することである。七〇年代から八〇年代にかけて意識に目覚めた女たちがとった行動は、やがて西洋が、すべてにわたって男性的に規定し尽くされている事実を浮上させる。多くの面でわれわれの生きる規範として現れる支配文化は、女性的な性格を完璧なまでに消去しえた結果として成立したものである。そして、当初は女と男が世界を均等に分かち合う理想へ向けてのステップだと信じられていた女の自由な行動や平等な社会参加、自立した生活の実現などは、じつはそれ自体が、男性的規範に合わせた均質化をとおして女性を労働市場へ吸収することで、資本をさらに巨大化しグローバル化させる戦略であったことが判明し始める。

もはやすべてが男性的に命名ずみの世界のなかで、女たち（そして非西洋に）残された道は、男たちによって培われた知識を学ぶ（真似ぶ）ことで、男たちと伍して行動できる能力を身につけることであった。この男性化という条件をクリアーすることによってしか社会への参加が許されない世界に生きている現実をさとった女たちは、当然のこととして男性的世界の起源への疑問を抱きはじめる。男性が圧倒的に勝利する以前には、女性的な世界が存在していたのか。もしそうだとしたら、女性的な世界は、どうして男性的な支配に屈服してしまったのか。フェミニズム世代が抱いたこうした疑問を再構成しながら、男性的に染め抜かれた世界の現実を認識するにいたった女たちが、女性排除の起源、すなわち女性の経済的従属の起源を突き詰めようとした過程を検討することがこの章のテーマとなる。

さらに第四章においては、女性的なものが排除された西洋世界のなかで、それでも現実には存在するとみなされる女性を特徴づける「女らしさ」の実体が何であるのかを、視線の観点から検討することが中心的な課題となる。視線に注目する必然性は、西洋世界において視線はつねに男性的権力の証であった伝統に由来する。しかしすでに第三章で判明したように、そもそも二十世紀後半期を、資本主義のアリーナに女性ならびに非西洋人の参入を許可する状況に拍車がかかった時期と認識するためには、そのまえにまず西洋が、秩序にとって障害となる快楽や官能性といった女性的要素を排除する闘争の歴史に、ひとまず決着をつけていたことが前提となる。

女性を排除する機構がどのようにして生まれ、資本主義の原動力となったのかを理解するためには、中世以降のヨーロッパの文化史を、一つの一貫した潮

流として記述する言説を修正する必要がある。ヨーロッパ近代化の歴史は、自然で自由な個人の主体的発展を称揚する南方的な流れと、そうした動きをキリスト教的な厳格さによって押しとどめようと逆方向に働くアルプス以北の流れとが、三世紀近く並行して存在するなか、やがて二つの奔流が十九世紀の幕開けとともにロマン主義的噴出によって交差し、そこからプロテスタントの禁欲主義的な価値観を基調に、近代資本主義が一気に開花していく過程として再構成することによって、はじめてその矛盾した糸が解けはじめる。

第二章から第三章にかけての検討課題が、女性独自の性的欲望の奪還にあったとすれば、第四章は、もう一つの目標、すなわちセクシュアリティと並んで女性から剥奪されてきた独自の視線を取り戻す可能性についての検討を主眼としている。女性独自のセクシュアリティの獲得に立ち返ってみると、それは第二章で判明したように、原初的な暴力性に満ちたマゾヒズムに、純粋な女の享樂の最も近い姿がみいだせる可能性が判明した。しかしそこからは、女たちが自律的に演じているかにみえるマゾヒズムの世界もまた、男性的サディズムを模倣したものである事実も明らかになった。

視線の奪還も似たような結果、すなわち男性的世界の模倣に帰着する可能性が大きい。視線そのものが西洋においては久しく男性に固有な知覚とみなされてきたことを考慮すると、フェミニズムの、セクシュアリティの獲得と並ぶもう一つの戦略としてあった視線の獲得もまた、抑圧からの解放に向けた行動として認識された事実とは裏腹に、それが男性的視線の模倣という均質化をとおした女性の労働市場への吸収を円滑化するための方便、つまり資本主義が予定済みのものとして進展したという可能性が生まれる。

そしてここで浮上する模倣の問題が、最後の課題として第五章に引き継がれることになる。注目するのは、模倣がじつは単なる受身的な行為だけではすまされない新たな可能性である。模倣は権力の側から強制されるものでありながら、じつはその模倣がホンモノと似れば似るほど権力が居心地の悪い場に追い込まれるという逆説的な仕組みが、そこには存在する。模倣をテーマに創作する現代アートが指し示す方向は、男性的な均質化を通してしかもはや社会参加が可能でない女性的他者に残された、けっして過小評価し得ない可能性なのかもしれない。つまり、ゲームの行われる西洋というスタジアムでのルールはすでに男性的に規定し尽くされている。しかし、そこに当初は予定されていなかった女性や外国人といった新たなメンバーが参入してくることで、スタジアム、すなわちわれわれの生きる世界全体のトポロジーが変容する可能性については、まだほとんど何も解明されていない。それが資本主義の新たな変容にすぎないのか、それとも人類の歴史を新たな段階に移行させる予兆なのか。この問題をさらなる研究の方向性として掲げることで、本論文はひとまず終結する。

